# 農林事業関係遺跡

発掘調査報告書

1982

地 道 跡 游 遊 跡 部 遊 跡 海 遊 遊 遊 遊 遊 遊 遊 遊 遊 遊 遊 遊 遊 遊 登 書

昭和57年3月山形県教育委員会

本報告書は、山形県教育委員会が山形県農林部の委託を受けて、昭和52年から54年度までに実施した地正面遺跡ほか3遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

出羽富士「鳥海山」を北に仰ぐ庄内平野は、日本でも屈指の穀倉地帯であり、また長年にわたり人々が生産の向上をめざして農業を営んでこられたところであります。昭和47年から着手された県営ほ場整備事業(日向川第II期地区)もそのご努力の一環であり、現在この地一帯は三反歩一枚の近代的ほ場として急速に変貌しつつあります。

近年埋蔵文化財と開発事業とのかかわりは増加の傾向にあり、県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の遺産である埋蔵文化財の保護行政との間には、多くの問題をかかえております。この間の調整は県政の重要な課題であり、県教育委員会におきましても今後とも鋭意努力を続けてまいる所存であります。

遊佐町下小松に所在するこの4遺跡の報告が、祖先の生活と歴史をさぐる手が かりとなり、文化財保護普及の一助になれば幸いと存じます。

最後に、調査にあたって多大な協力をいただいた関係各位に、心から感謝を申 し上げます。

昭和 57 年 3 月

山形県教育委員会 教育長 大 竹 正 治

## 例 言

1 本報告書は、山形県教育委員会が昭和52年から54年度に実施した、県営ほ場整備事業(日向川第II期地区)に関連する地正面遺跡ほか3遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2 各遺跡の調査期間は、次のとおりである。

前田遺跡 昭和 52 年 4 月 19 日 ~ 同年 5 月 31 日

地正面遺跡 1 次調査 昭和 52 年 5 月 9 日 ~ 同年 5 月 31 日

地正面遺跡 2 次調査 昭和 53 年 10 月 16 日  $\sim$  同年 11 月 30 日

塚田遺跡 昭和 54 年 10 月 22 日 ~ 同年 11 月 27 日

佐渡遺跡 昭和 54 年 10 月 22 日 ~ 同年 11 月 27 日

3 挿図縮尺は、遺構については1/80、遺物については1/3 を原則とし、各々にスケールを示した。遺物の図版については約1/3 を原則としたが、一部縮尺不同のものもある。詳細については各遺物の計測表を参照願いたい。なお土器実測図の中で、断面を黒く塗りつぶしているものは須恵器、内外面に点描のあるものは黒色化処理を示している。

4 発掘調査は山形県教育委員会が主体となり、山形県教育庁文化課および教育庁庄内教育事務所の下記職員が担当した。

前田遺跡 佐藤庄一・手塚 孝・阿部明彦・名和達朗

地正面遺跡1次調査 佐藤庄一・手塚 孝・阿部明彦・名和達朗

地正面遺跡2次調査 佐藤庄一・阿部明彦・茨木光裕・佐藤正俊・手塚 孝

塚田遺跡 川崎利夫・野尻 侃・長橋 至・大類 誠

佐渡遺跡 佐々木洋治・尾形與典・佐藤庄一・安部 実・佐藤義信

5 本報告書の作成は、 山形県教育庁庄内教育事務所埋蔵文化財分室が担当し、 佐藤庄 一・野尻 侃・安部 実が分担執筆した。編集は野尻 侃・写真図版については安部 実 が担当し、全体を佐藤庄一が総括した。実測図や挿図作成については、中村敬三・加藤 ひとみ・石井 節・水落みち子の協力を得た。

6 調査に際しては、遊佐町教育委員会・山形県農林部など関係諸機関の協力を得た。

# 目 次

	序	<del>,</del>	Ц ()	
	例	」言		
Ι		遺跡の概額	<b>鼰</b>	
	1	立地と野	<b>環境·····</b>	1
	2	調査に3	至る経過	1
	3	調査の絲	径過	3
	4	遺跡の層	晉序	6
II		地正面遺跡	跡	
	1	遺 構・		7
			建物跡	
		(2)竪穴住居	舌跡	10
		(3)性格不明	明遺構	10
		(4)井戸跡		13
		(5)土壙 …		13
		(6)溝跡 …		14
	2	遺物		
		(1)土器 …		14
		建物跡・	<ul><li>住居跡・土壙等出土土器</li></ul>	14
		S X 11	遺構出土土器	16
		S E 3 ‡	井戸跡出土土器	20
		(2)墨書土器	器	22
		(3)その他の	ひ遺物	22
III		前田遺跡		
	1	遺構		24
	2	遺物		26
IV		塚田遺跡		
	1	遺構		27
	2	遺物		29
V		佐渡遺跡		
	2	遺物		33
VI		ま と &	b	35

### 揷図目次

### 図版目次

第1図	遺跡位置・分布図2	図版 1	地正面遺跡	下小松地区遠景•地
第2図	地正面他3遺跡グリッド配置図4			正面遺跡近景・1次
第3図	土層図6			調査精査区近景
第4図	地正面遺跡遺構配置図8	図版 2	地正面遺跡	2次調査北地区全景
第5図	S B 101・112・132建物跡 9	ज्याद्ध २	44.工品、串味	<ul><li>南地区全景</li><li>S B 101・112・132建</li></ul>
第6図	S X11・S T 146・147住居跡…11	図版 3	地正面遺跡	物跡·S K143·145·
第7図	S E 3 井戸跡12			149土壙
第8図	遺構內出土土器15	図版 4	地正面遺跡	S T146・147住居跡
第9図	S X11遺構出土土器(1)······18			・S X11落ち込み
第10図	S X 11遺構出土土器(2)······19	図版 5	地正面遺跡	SE3井戸跡
第11図	S E 3 井戸跡出土土器21	図版 6	地正面遺跡	前田遺跡遠景・南東
第12図	墨書土器・木製品23			精査区近景・SK16
第13図	前田遺跡遺構配置図24	図版 7	塚田遺跡	土壙 遺跡遠景•精査区東
第14図	S K16・S K21土壙······25	凶版 7	塚田 退 跡。	半近景•西半近景
第15図	出土遺物26	図版 8	塚田遺跡	精査区西半遺構検出
第16図	塚田遺跡遺構配置図27			状況・土壙
第17図	S K16 • 17 • 18土壙······28	図版 9	佐渡遺跡	精査区近景•遺跡近
第18図	出土土器30			景
第19図	佐渡遺跡遺構配置図32	図版10	佐渡遺跡	SB7建物跡・SX
第20図	出土遺物34			3落ち込み・下駄出
		図版11	地正面遺跡	土状況 建物跡・土壙・出土
		凶/汉11	地址即熄妳	土器
	遺構内出土土器点数表	図版12	地正面遺跡	S X 11遺構出土土器(1)
	建物跡•住居跡•土壙出土土器観察表	図版13	地正面遺跡	S X11遺構出土土器(2)
表 3	S X11落ち込み遺構出土土器点数表	図版14	地正面遺跡	SE3井戸跡出土土器
表 4	S X11落ち込み遺構出土土器分類表	図版15	地正面遺跡	墨書土器•木製品•
表 5	SE3井戸跡出土土器観察表			種子
表 6	墨書土器(須恵器)観察表	図版16	前田遺跡	出土遺物
表 7	前田遺跡出土土器観察表	図版17	塚田遺跡	出土遺物
表 8	塚田遺跡出土土器観察表	図版18	佐渡遺跡	出土遺物
表 9	佐渡遺跡出土遺物観察表			

### I 遺跡の概観

#### 1 立地と環境 (第1図)

日本有数の大河である最上川は、庄内平野を刻み込むように緩やかな曲流を示しつつ西下し、日本海に注いでいる。本書で報告する地正面ほか3遺跡は、庄内平野の北辺部、日向川と月光川にはさまれた水田地帯に位置する。行政区分では、山形県飽海郡遊佐町大字下小松地内にあたる。

この付近の地形は、東から(1)出羽丘陵の一部をなす蕨岡・山根丘陵、(2)庄内北部河間低地、(3)吹浦三角洲、(4)庄内北部砂丘の4つに区分される。遺跡群は、いずれも庄内北部河間低地にあり、周囲より一段高い微高地上に立地する。

地目は現在水田になっており、表層の地質は、粘土およびシルトからなる沖積層で、ときに有機質植物・砂・礫などが混在する。細粒の強グライ土壌で、地下水位は比較的高い。 庄内平野の北半部、通称飽海平野ともよばれる水田地帯には、国指定史跡の酒田市城輪 柵跡・八幡町堂の前遺跡をはじめ、平安時代の遺跡が数多く立地している。城輪柵跡は、 平安時代の出羽国府とする説が有力であり、堂の前遺跡や八幡町八森遺跡・酒田市上ノ田 遺跡なども官衙や寺院などの公的な施設と推定されている。

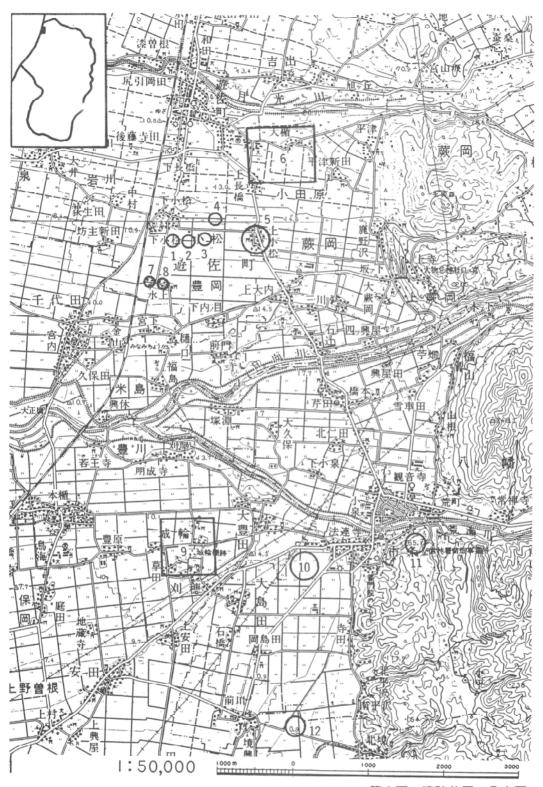
遊佐町北端の下小松から上小松にかけての地域も遺跡密集地の一つであるが、日向川および荒瀬川左岸の地域に比べて、これまで本格的な調査例がなく実態は明らかでなかった。

#### 2 調査に至る経過

地正面遺跡ほか3遺跡は、山形県教育委員会が昭和48年に実施した庄内広域営農団地農 道整備事業関係遺跡分布調査の際に新しく発見されたもので、前田・地正面・塚田・佐渡 の所在地小字名をあてて遺跡名としている。4遺跡とも種別は平安時代の集落跡である。

この地に昭和52年度から、県営ほ場整備事業(日向川第II期地区)が施工されることになり、昭和51年11月の分布調査の内容をもとに、山形県教育委員会が県農林部や遊佐町教育委員会など関係機関と協議をした結果、昭和52年度から3ヶ年計画で緊急発掘調査を実施することになったものである。

昭和52年度は、前田・地正面遺跡を主体に各遺跡の道路と水路部分についての調査、昭和53年度は地正面遺跡の面にかかわる調査、昭和54年度は塚田・佐渡遺跡の面にかかわる調査を実施した。なお地正面遺跡は、昭和52年度の水路敷部分で井戸跡を含む遺構群がかかり、この地域を精査したため、とくに52年度分を1次調査、53年度分を2次調査とよぶ。



第1図 遺跡位置・分布図

- 1 前田遺跡 2 地正面遺跡 3 塚田遺跡 4 佐渡遺跡 5 長田遺跡 6 大楯館跡 7 水上C遺跡 8 山道端遺跡
- 9 城輪棚跡 10 堂の前遺跡 11 八森遺跡 12 上ノ田遺跡

#### 3 調査の経過 (第2図)

調査は、地正面遺跡ほか 3 遺跡全体に、東西 850 m×南北 500 mの範囲でグリッドの基準杭を設定した。グリッドは 2 m四方を一単位として、座標はX 軸を西から東方向、Y 軸を南から北方向にとった。各遺跡のグリッドの名称は、4 遺跡共通して、たとえば 250 (東西X 軸) -130 (南北Y 軸) グリッドと呼ぶ。グリッドの南北基準線は、水田の畦畔に合わせたため、その方位は真北に対し 1 度42分束に傾いている。

52 年度の調査は、4 遺跡の道路および水路敷予定部分を対象として、はじめ 50 m毎に 2 m四方の坪掘りを行ない、遺跡のおおよその範囲確認を試みた。つぎに遺構・遺物の検出 地域 11 ケ所について  $2\sim 4$  m幅のトレンチを設定した。トレンチ部分の表土剝ぎに際して は重機を使用している。

この結果、前田遺跡南東部と地正面遺跡北部に遺構が密集して検出されたので、調査の後半は両地区の拡張と精査に力を尽やした。前田遺跡南東部では土壙5基と溝状遺構7条、地正面遺跡北部では落ち込み遺構1基、井戸跡1基、土壙9基、溝状遺構1条などが発見されている。精査面積は両地区合せて624㎡である。

53 年度の調査は、地正面遺跡を対象として、井戸跡などが検出された 1 次調査の北側と南側 2320 ㎡を重機を用いて拡張のうえ精査した。調査期間が晩秋から初冬にあたったため、天候に悩まされ、実質的な精査面積は 600 ㎡位に減じている。発見された遺構には、掘立柱建物跡 2 棟、倉庫跡 2 棟、柱列 2 本、竪穴住居跡 2 棟、土壙 7 基などがある。時期は、いずれも  $9\sim10$  世紀代、平安時代前半に属し、4 遺跡の精査地区の中では遺構がもっともまとまりをもって検出された場所である。

54 年度の調査は、塚田遺跡と佐渡遺跡を対象にし、班編成を山形県教育庁庄内教育事務所と同文化課の2班に分けて実施した。

塚田遺跡の調査は、昭和52年度の水路部分の内容をもとに、庄内広域営農団地農道の100m西側、現排水路の南側1000㎡を重機を用いて拡張のうえ精査した。精査区域のうち東側は面整理段階で遺構がほとんど認められなかったため、調査の後半は精査区域の西側に力を集中している。発見された遺構には、土壙3基、ピット群1ケ所などがある。

佐渡遺跡の調査は、昭和52年度の水路部分の内容をもとに、庄内広域営農団地農道のすぐ東側、現排水路の北側1200㎡を重機を用いて拡張のうえ精査した。発見された遺構には、掘立柱建物跡1棟、旧水田の畦畔および水路1組、溝状遺構2条、ピット群1ケ所などがある。畦畔跡の時期は、畦畔を切っている溝状遺構の年代が出土遺物などから平安時代前半と考えられるので、少くともこれを降ることはない。また掘立柱建物跡の時期も、平安時代前半に位置付けられる。

	per per support for	300	
100 mm m		250	佐渡遺跡
110 110 110 110 110 110 110 110 110 110		77 74 74 74 74 200	20 de
AN A	11 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 12 1		庄内広域営農団地農道
0 41. 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15 15		T A III	450
0	前田遺跡	ませて 1853 まご 2723 ま 2 m 2.E	170 170
	200	300 350	100 100 and

#### 4 遺跡の層序 (第3図)

地正面遺跡ほか3遺跡は、庄内北部河間低地の北辺出羽丘陵寄りに立地する。遺跡群の南側と北側をともに約2km離れて日向川と月光川が流れている。遺跡付近の地層は、海抜標高11~13mの間で、おおむね南東から北西に向って低く緩やかに傾斜する。水田の耕作などによって旧地形はかなり削平されているが、それでも遺構や遺物の分布から推定される各遺跡の範囲は、周囲より一段高い微高地上にあたることがわかる。

遺跡群の基本的な層序は、前田遺跡北西隈の79-126グリッド西壁断面によって観察した。この地域は遺物の出土量は少ないが、表土から第IV層面までの土層が厚く堆積しており、本来の層序がより明確に確認できる。下段は、佐渡遺跡精査区西端410-260~262グリッド西壁断面の土層である。佐渡遺跡も含めた各遺跡の遺構検出地域の土層は、後世の水田耕作によって第II層以下がかなり削平されており、第IV層の遺構検出面までの土層が30 cm前後と浅くなっている。つぎに土層について述べる。

第1層 褐色耕作土

水田の耕作土で砂分を含み、20 cm程の厚さで堆積する。

地点によっては、本層を1a層 (茶褐色砂質微砂) と1b

層(暗褐色砂質粘土)に細分できる。

第11層 暗灰褐色粘質土

炭化物を少量含み、5~25 cmの厚さで堆積する。

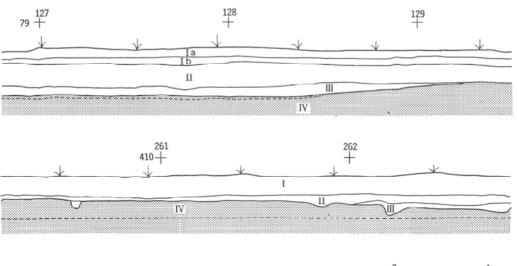
第Ⅲ層 黒褐色粘質微砂

炭化物と遺物を多く含む平安時代から室町時代にかけての 包含層で、遺構検出地域に多く堆積する。地点によって腐

蝕植物を多量に含む場所もある。

第IV層 青灰色粘質砂

無遺物層で、多くの遺構の壁や底面を構成する。



第3図 土層図



### II 地正面遺跡

- 1 遺 構(第5図・図版3~5)
- (1) **掘立柱建物跡** (第5図・図版3)

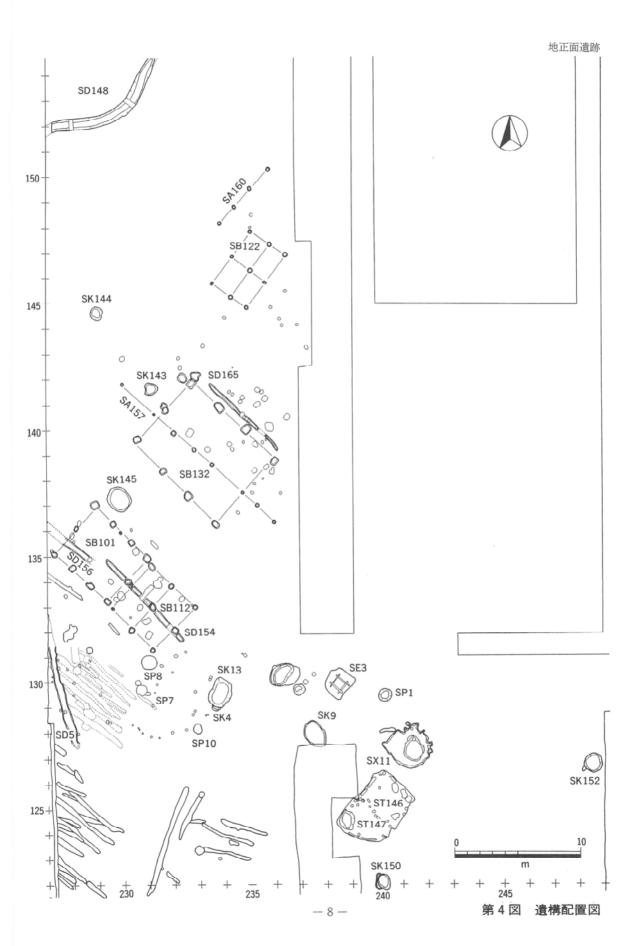
SB101建物跡 227~231-133~137グリッドで確認された梁行 2 間、桁行 3 間の南北棟である。柱間距離は、梁行258cm(8 尺)、桁行190cm(6 尺)前後であるが、各柱間に差異がある。梁行長 5 m、桁行長 6 mを測る。柱穴の掘り方は、約40cm、深さ30~50cmの方形ないしは隅丸方形を呈し、直線的に並ぶ。埋土は暗茶褐色粘質土と茶褐色砂質土を交互にふみ固めている。本建物跡の中央部にSD154溝跡が南北に定り、EB108柱穴と重複している。断面の観察では、EB108柱穴が、SD154溝跡を切って掘られている。主軸方向はN-48°-Wである。

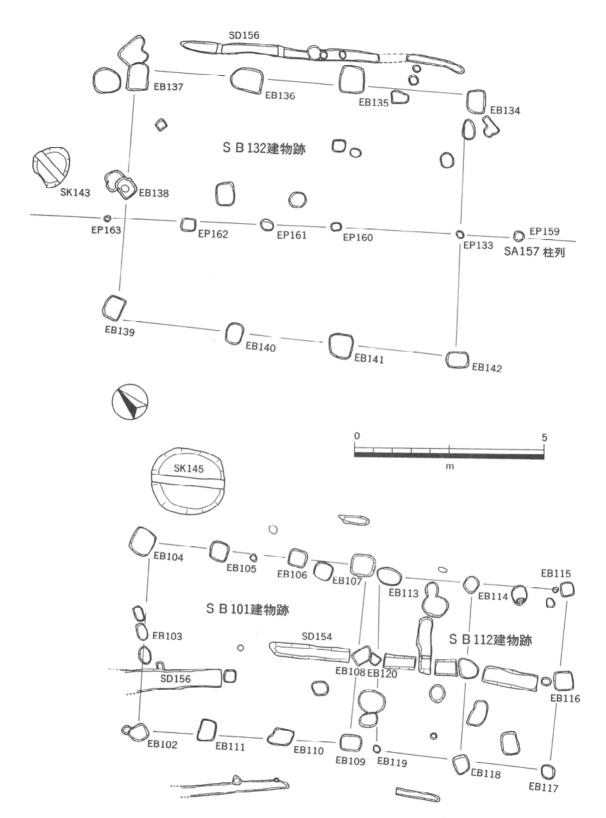
SB132建物跡 230~236—136~142グリッドで確認された梁行 2 間、桁行 3 間の南北棟である。本遺跡で最も大きな建物跡である。柱間距離は、梁行320cm(11尺)、桁行280~300 cm(10尺)である。建物の長さは梁行長 6 m、桁行長 9 mを測るが、南面梁行がやや広がる。柱穴の掘り方は一辺40cm位の方形を呈し、深さ30~50cmである。埋土は SB101と同様である。本建物跡の東面には、幅20cm、深さ 5~7 cm、長さ760cmの溝が並行して走り、この建物に伴う雨落ち溝と考えられる。本建物跡の中央部には、SA157塀列を確認したが、その先後関係は不明である。主軸方向は、 $N-45^\circ$ —Wを測る。

S B 112建物跡 229~232~131~134グリッドで確認された東西 2 間、南北 2 間の建物跡である。柱間距離は、東西240cm(8 尺)、南北240cm(8 尺)等間である。柱穴の掘り方は、径30~50cmの隅丸方形ないしは楕円形を呈する。埋土はS B 101と同様である。建物の中央部をS D 154溝跡が南北に走る。先後関係は、本建物跡のE B 116柱穴がS D 154を切っている。主軸方向はN-45°-Wで、S B 132建物跡と同じ向きを示している。付属する建物跡(倉庫跡)と考えられる。

SB122建物跡  $234\sim236-145\sim147$ グリッドで確認された東西 2 間×南北 2 間の建物跡である。柱間距離は、東西180cm(6 尺)、南北270cm(9 尺)である。東西340cm、南北530cm のやや南北に長い建物である。柱穴の掘り方は径 $20\sim30$ cmの円形を呈し、径10cmのアタリが認められ、直線的に並んでいる。埋土は、他の建物跡と異なり明褐色砂質土と褐色粘質土であるが、埋め方が雑である。時期は前述した建物より一時期異なるものと考えられる。主軸方向は、N-56°30″—Wで、倉庫跡と考えられる。

SA157・166柱穴列 SA157柱穴列は、231~235-134~140グリッドで確認された南北6





第5図 SB101・112・132建物跡

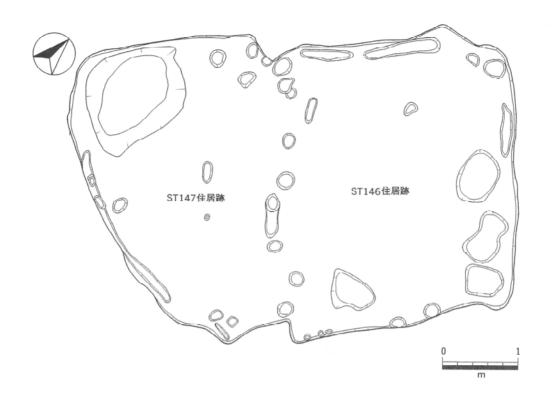
間の柱穴列である。柱間は2.80cm(約9尺)を測るが、一部に柱間が広がる所もある。柱穴の掘り方は径30cmの円形を呈する。本柱穴列は、S B 132建物跡のほぼ中央部を南北に存在し、その先後関係は不明である。主軸方向をN-49°-Wを測る。S A 166柱穴列は  $233\sim235-148\sim150$ グリッド、S B 122建物跡の北方180cmの地点で確認された東西 3 間の柱穴列である。柱間は180cm(6 尺)を測るが、東側の柱間はやや広い。柱穴の掘り方は径 30cmの円形を呈する。これら 2 列の柱穴は、建物跡に伴うものであるが、その組合せは不明である。

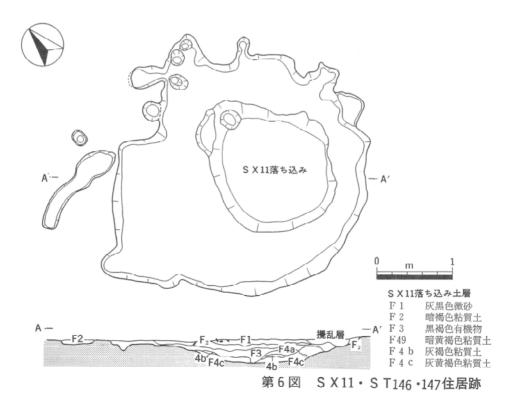
#### (2) 竪穴住居跡 (第6図・図版4)

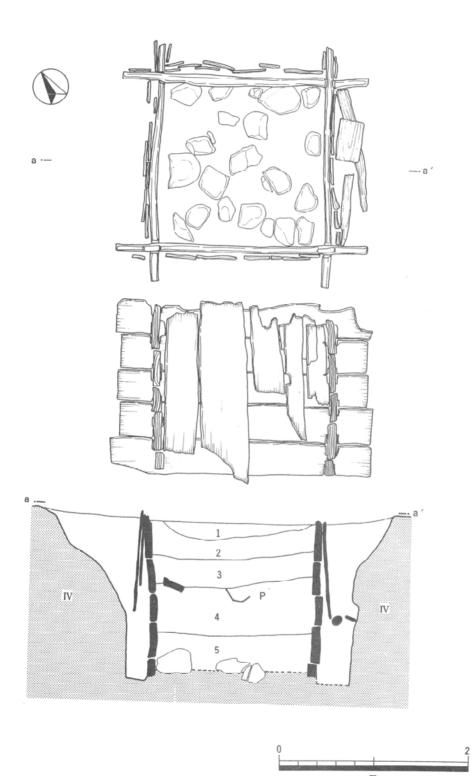
ST146住居跡 239~241-124~126グリッドで確認された竪穴住居跡である。ST147住居跡と重複している。東西330cm、南北380cmで、床面積12.5㎡を測り、南北が長い方形を呈する。主軸方向は、N−48°30′−Wである。周壁は2~4cm程遺存しているが、ST147住居跡との先後関係は判然としない。周壁の一部には周溝が幅15~20cm、深さ5~8cm、長さ60~70cmにめぐり、壁柱穴も一部に認められる。平面での検出状態から、ST146住居跡の壁柱穴や周溝が、ST147住居跡の床面に認められることから、ST146住居跡が後に営なまれたものと考えられる。時期は、床面出土の土器により平安時代前期と考えられる。ST147住居跡 238~240-123~125グリッドで、確認された竪穴住居跡である。ST146住居跡によって東半部を切られている。南北400cm、東西は推定330cmを測る。南北にやや長い隅丸方形を呈している。主軸方向は、N−70°−Wで、やや東西向きを測る。周壁は、西側で明確に判別され、高さ3~5cmの立ち上がりを呈している。周溝も西側で、幅8~15cm、深さ3~14cm、長さ230cmにめぐり、北・南側では、径15~20cm、深さ5~8cmの壁柱穴がある。床面は平坦である。北西隅には、長径140cm、短径116cm、深さ16cmの楕円形を呈した落ち込み部がある。時期は床面に張りついている土器により、平安時代中葉10世紀代と考えられる。

#### (3) 性格不明の遺構(第6図・図版4)

SX11遺構  $240\sim242-125\sim127$ グリッド、ST146住居跡の北側で確認された西側に角をもつ不整の円形を呈した落ち込み遺構である。東西310cm、南北330cmの範囲を呈し、中央部に径160cm、深さ $9\sim15$ cmの円形を呈する掘り込みがある。断面の観察では、中央部にある円形を呈した掘り込みが、外側にある落ち込み部を切って作られている。中央部の落ち込み部の覆土は、4つに大別され、上層は炭化物・灰・焼土などが多量に含み、土器がまとまって出土(第 $9\cdot10$ 図)した。中には墨書土器も存在する。土器溜めの遺構とも考えられる。外側の遺構は、周壁が $12\sim15$ cmにゆるやかな立ち上がりを示し、底面は平坦である。南壁には50cm×30cmの焼土が認められる。北壁部には径 $20\sim30$ cmのピットが認められ







第7図 SE3井戸跡

るが、その他にはない。平面形は不規則であるが、焼土の存在等で、竪穴住居跡にも考えられる。出土土器により本遺構の時期は平安時代前半9世紀末葉にあてられる。

#### (4) 井戸跡 (第7図・図版5)

SE3井戸跡 238—130 グリッド、SX 11 の北方 6 mで確認された井戸跡である。井戸の掘り方は、東西 210 cm、南北 190 cmの不整な隅丸方形を呈し、深さ 90 cmの掘り込みをもつ。内部には遺存状態の良好な井戸枠組を組み入れている。井戸枠組は、幅 18 cm $\sim$ 20 cm、長さ  $130\sim137$  cm、厚さ  $3\sim4$  cmの征目の板材を井桁に組み入れ、5 段となる。組み込まれた大きさは、一辺 87 cm(約 3 尺)四方である。井戸枠組の外側には、幅  $10\sim25$  cm、長さ  $45\sim98$  cm、厚さ 2 cmの板材を一辺に  $6\sim7$  板を打ち込んでおり、井戸枠組の補強と、内部に泥砂が入り込まないよう浄化の仕組が施こされている。また井戸底面にも人頭大の河原石がおかれ、同様に浄化に供している。

井戸枠組内の土層は以下の通りである。

- 1 暗茶褐色粘質微砂層
- 2 灰茶褐色粘質徴砂層 (一部に炭化物を含む。)
- 3 暗灰褐色シルト層 (炭化しきれない有機質物を少量含む。)
- 4 暗青灰色砂層 (斑点状に有機質物を含む。)
- 5 黒褐色シルト層 (有機質物を多量に含む。)
- IV 青灰色粘質砂層 (地表近くは酸化し、黄褐色を呈す。)

出土遺物は井戸枠組内より第11図にある土器や、木質のザル・曲物・蓋・箸等の出土があった。出土土器により、本井戸跡の時期は、平安時代中葉10世紀代にあてられる。

#### (5) 土壙(第4図)

21 基の土壙が確認された。円形や楕円形を呈するもので、径 1 m内外の円形を呈し、比較的深い土壙と、径 2 m位の円形・楕円形を呈する浅い土壙とに分けることが出来る。

**SK 44 土**壙 228・229-145 グリッドで確認された円形を呈する土壙である。径 90 cm、深 さ 40 cmを測り、底面は丸底を呈する。覆土中には炭化物や土器片を含み、性格は不明である。

SK 45 土壙 229~230-137・138 グリッドで確認された楕円形を呈する土壙である。長径 195 cm、短径 170 cmを測り、深さ 13 cmの浅い土壙である。底面は船底を呈し、覆土中からは、ゆうがおの種子がまとまって出土している。貯蔵穴と考えられる。

#### (6) 溝状遺構 (第4図)

数条の溝跡が確認されたが、後世につくられた溝跡が多く、ここでは平安時代の遺物を

伴出した溝跡を記述する。SD148溝跡は、調査区北側 $227\sim231-151\sim155$ グリッドで確認された幅 $80\sim100$ cm、深さ30cmの集落を区画するような性格を示す溝跡である。覆土中からは、くるみ、ももなどの種子や土器片が出土している。他の溝跡では、 $SB101\cdot112$ 建物跡と重複した溝があり、建物群より1時期古い溝跡も存在する。

#### 2 遺物

#### (1) **遺構内出土土器** (第8図・図版11・表1・2)

本遺跡遺構内出土の土器点数は434片を数える。内訳は、土師器18片、須恵器117片、赤焼土器294片である。建物跡の柱穴からは比較的赤焼土器片の出土が多い。土壙ではSK143土壙からは土師器が多く出土しており、一時期古い様相を示している。全体的に観察すれば、建物跡は9世紀後半の時期に比定され、先の土壙は9世紀前半に分けられる。

SХ11遺構・SE3井戸跡出土の遺物については次章で述べる。

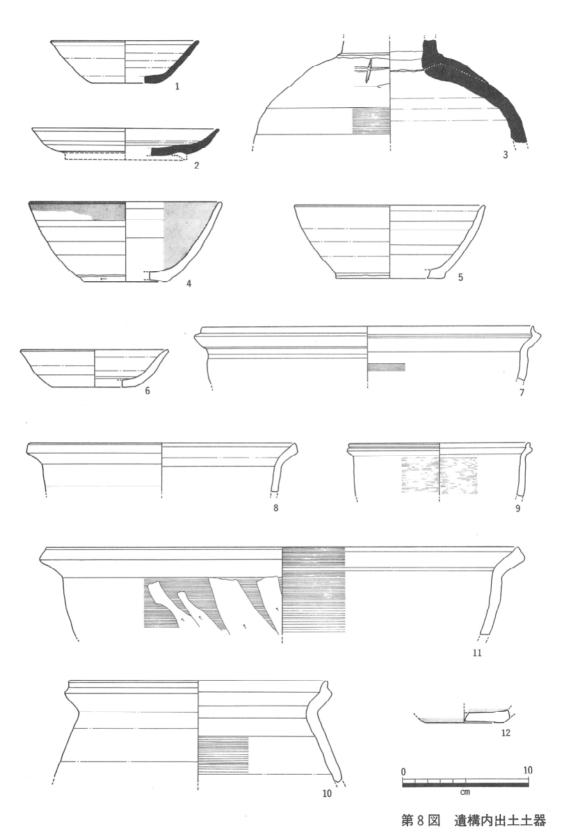
表 1 遺構内出土土器点数表

1	重 別	土角	币器	須恵器	赤 焼	7-	推定年代
遺	構	内 黒	内外黒		土器		
	SK 1	,,		4	17	21	9世紀後半
5	SK 2			5	5	10	10~11世紀
1 5	SK 4	1		48	71	120	10世紀前半
	5K 6			5	4	9	9世紀後半
5	SK 8			1	1	2	10~11世紀
	SK 9			5	11	16	9世紀後半
\$	SK10			3	7	10	9世紀後半
	EB102				1	1	10世紀前半
S	EB105			1		1	11
	EB106				3	3	11
В	EB107			1	6	7	11
	EB108				1	1	11
101	EB111			1		1	"
	EB113				7	7	11

種	別	土自	市器	須恵器	赤焼	計	推定年代
遺	構	内 黒	内外黒		土 器		
SBIN	EB116			1	5	6	10世紀前半
SBIZ	EB142				9	9	10世紀前半
SI	K143	10		2	14	26	10世紀前半
SI	K144			4	26	30	9~10世紀
SI	K145			6	42	48	9世紀後半
S'	T146			9	13	22	9世紀後半
S	T147			1	12	13	9世紀後半
SI	D148			14	3	17	9世紀後半
SI	K149		1	7	5	13	10世紀後半
SI	SD154		1	4	26	31	10世紀前半
SD156					4	4	10~11世紀
SI	SK158				8	8	10~11世紀
Ħ		11	2	122	301	436	

表 2 建物跡、住居跡、土壙出土土器観察表

挿図	器	計	測値(	m/m)	色 調	胎 土	焼成	底部切り	atern with July Sale	Shill Life E BA
番号	種	口径	底 径	器高				離し技法	調整技法	法出土地点•層位
1	坏	117	51	33	灰 色	粗砂混	良	不 明		SK 4 F1
2	台付皿	148	96		灰色	粗砂混	良	回転糸切り		SD 148 F
3	莖				灰 色	粗砂混	良			SK149 F
4	±不	154	64	62	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ、底部にケズリ、黒色化	SK143 F1
5	坏	150	85	57	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK143 F1
6	坪	117	65	29.5	赤褐色	粗砂混	良	ヘラ切り(?)		SK145 F
7	甕	262			明黒褐色	粗砂混	良		内外ナデ、一部内面カキ目	SK 4 F1
8	甕	210			赤褐色	粗砂混	良		外面スス付着	SK 4 F1
9	小形甕	144			黒褐色	粗砂混	良		内面カキ目	ST147 F
10	甕	204			赤褐色	粗砂混	良		外面スス付着	EP153 F
11	甕	374			明褐色	粗砂混	良		内・外面スス付着、外面ケズリ	SK145 F1~2
12	皿(?)		61		明灰褐色	良	良		台下まで釉 (淡緑釉)	SK 4 F1



-15-

#### (2) S X 11落ち込み遺構の出土土器 (第9・10図、図版12・13)

S X11は東西径3.8m、南北3.4mの不整円形の落ち込みで、下層が根木によって攪乱されているため性格は明らかでない。本遺構の覆土は4層に大別されるが、そのうちの最上層から土器が多量に出土した。土器は、土師器・須恵器・赤焼土器の三つに大別できる。分類可能な土器片482個のうち、量的には須恵器が50.2%を占め、ついで赤焼土器が44.6%となり、土師器は5.2%と少ない。

S X11落ち込みの土器群は、胎土・焼成・形態・成形手法・調整技法などの諸属性から、 3 大別14器種34類に細別される。詳細について次頁以下に実測図と表を掲げる。

須恵器は、坏・高台付坏・蓋・鉢・壺・甕の器種があり、坏が高台付坏も含め全体の77%を占める。坏は底部の切り離しがヘラ切りと回転糸切りの二つがあり、内訳は切り離し手法を識別できる破片142のうち、ヘラ切りが92%、回転糸切りが8%である。坏は $A1 \sim A5$ の5類に細分され、量的には $A1 \sim A3$ 類が多い。高台付坏は4類に細分され、B1類が坏のA2類、B2類が坏 A3類に対応する。坏の中ではとくにA1類とした口径が大きく口縁部が外反するものに注目したい。本類は色調が乳灰色で焼成が甘いという特徴がある。蓋は5類に細分されるが、C2類とC5類とした天井部が丸味を持つものが多い。蓋は4類に分けられ、1点のみの出土であるが、E1類とした北陸系の双耳壺の存在が注目される。甕については口縁部片がないため便宜上叩き目の差によって2類に分けた。

土師器は、少量で細片のため不明な点も多いが、坏・蓋・小形壺・小形甕・甕の器種がある。とくに I1・J2 類とした体部外面に縦方向の刷毛目を持つ土器は、庄内地方で類例が少なく注目される。

赤焼土器は、坏・小形甕・甕・堝の器種があり、M2・M3類とした体部上半に横方向のカキ目があるものと体部下半内外に条線状の叩き目を持つものが多い。両類は1個体の土器に共伴するものとみられ、口縁部が「く」の字状に外反する長胴丸底の甕になるのであろう。

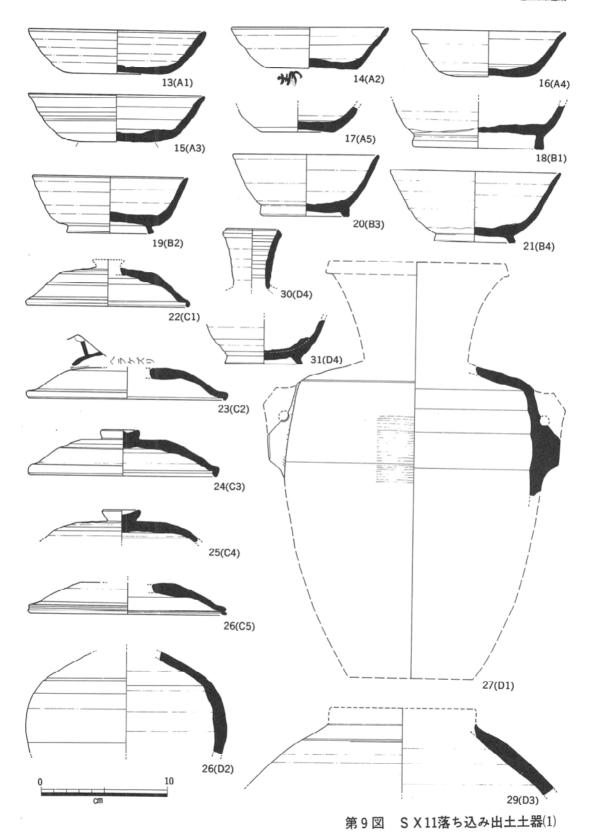
これらの土器群は、須恵器各器種の形態にこそ差があるものの、赤焼土器の甕M種の口縁部形態などにはほとんど差異がないことから、極めて近接した時期で型式学的には一型式として把握できるものである。本土器群の組成は、これまで山形県内陸部では類別がみられなかったもので、庄内地方で概報告のものとしては藤島町平形遺跡 SX3 落ち込みや酒田市上ノ田遺跡 S D401大溝の土器片に類似性をもつ。また富山県や石川県・新潟県などの北陸地方の土器にも共通性がある。

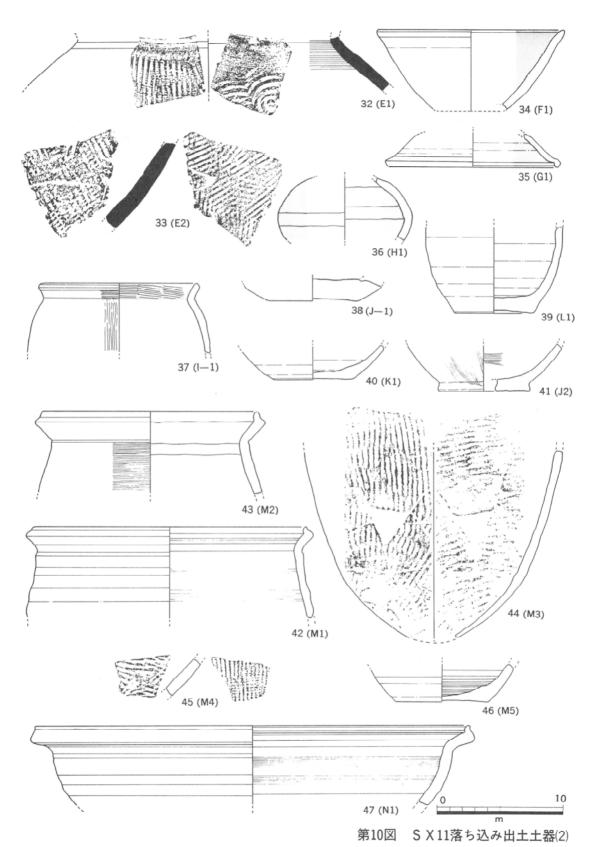
#### 表3 SX11落ち込み遺構出土土器点数表

	種別		須	恵	器			土	師	器			赤焼	土 器	ļ	
分類		A 坏	B 高台坏	C 蓋	D 壺	E W	F 坏	G 蓋	H 小形壺	I 小形甕	J 変	K 坏	L 小形甕	M 要	N 坏	小計
	1	21	4	1	1	16	15	1	1	2	3	4	19	27	1	
	2	26	5	8	4	1					3			53		
	3	29	5	5	2									73		
	4	8	1	1	2									4		
	5	11		8										11		
そ	の他	ヘラ切り 47	ヘラ切り 9	9	18							18			5	
		糸切り 0	糸切り 0													
	(小計 %)	142 (29.5)	24 (5.0)	32 (6.7)	27 (5.6)	17 (3.5)	15 (3.1)	1 (0.2)	1 (0.2)	2 (0.4)	6 (1.2)	22 (4.6)	19 (3.9)	168 (34.9)	6 (1.2)	482 (100)
体部	片等	10	00	-			_				_	_		92		,,,,,
種別	合計		342	(50.7%	6)			25	(3.7%)	)			307 (45			674

#### 表 4 S X 11落ち込み遺構出土土器分類表

				退得山工					
器	種					(m/m)	底部切り	形能 小妹 鄉 超 地址	Mr. 11
		記号	番号			器高	雕し技法	形態の特徴・調整技法	備考
		A 1	13	(140)	72	34	ヘラ切り	口径が大きく、体部が外反。焼成は本類全体が不良。	
		A 2	14	123	73	33	11	体部と底部の境界が明瞭で、体部が直線的に立上る。	
	t不	A 3	15	140	86	38	"	体部と底部の境界が不明瞭で、やや丸味を持つもの。	底部墨書「?」
須		A 4	16			36	"	底部全面にナデ調整、丸味をもって体部に移るもの。	
	-	A 5	17		58		回転糸切り	底径が小さく、器高が高いもの。底部は糸切り無調整。	
	高台	B1 B2	18 19	(10.1)	(00)	130	ヘラ切り	底径が大きく、体部がやや直線的に立上るもの。	
	付付	B3	20	(124)	(66)	46	"	体部下半がやや丸味をもって立上るもの。	l
	坏	B4		(116)	70	50	// F=14= 4/ bit in	口径が小さく、器高が高いもの。	
	1,		21	(136)	(61)	57	回転糸切り	底径が小さく、体部下半が丸味をもって立上るもの。	
+		C1	22	(130)			ヘラ切り	天井部が平担で、ヘラ切りの痕跡が認められるもの。	
恵		C 2	23	(160)			"	天井部が丸味をもち、ヘラ削り調整が認められるもの。	
	蓋	C 3	24	(151)		36	n	天井部が丸味をもち、ナデ調整あり。紐部は疑宝珠形。	上面墨書「上」
		C 4	25				"	器形はC3類と同様で、紐部が扁平化しているもの。	
		C 5	26	154			"	器形はC3類と同様で、口縁外面に沈線を有するもの。	
		D1	27	(体部員	大径)	(200)		双耳瓶の肩部で、肩部外面に横位のカキ目がみられる。	
		D 2	28	( //	)	(160)		肩部に最大径をもつ長頸壺。	
	壺	D3	29					体部中位、最大径をもつ大形短頸壺。内外にロクロ目。	
器		D4	30	(41)				口縁端がやや内傾する小形の長頸壺。	
		n	31			(61)	ヘラ切り(?)	小形壺の底部で、高台が付くもの。	内面灰かぶり
	甕	E1	32					甕の体部片で、外面に条線状叩き目、内画に青海波文。	
		E 2	33					甕の体部片で、外面条線状叩き目、内面格子目アテ痕。	
	坏	F1	34	(146)			回転糸切り	ロクロ使用、平底の坏で、内面に黒色化処理あり。	
土	蓋	G1	35	(136)				ロクロ使用、内面ヘラミガキののち黒色化処理。	
師	小形壺		36	(体部最	大径)	(106)		内外面黒色化処理、内面に横方向のナデ調整。	
,	小形甕		37	(128)				口縁部が軽く外反する小形甕、外面に縦方向の刷毛目。	
器	甕	J1	38			(74)	?	内面に黒色化処理が施されているもの (底部片)	
		J 2	39			(71)	?	外面に縦位の刷毛目、内面に横位の刷毛目のあるもの。	
	坏	K1	40			(68)	回転糸切り	酸化炎焼成、ロクロ切り離し無調整の坏。	
赤	小形甕	-	41			(64)	回転糸切り	酸化炎焼成、ロクロ整形の小形甕。	
~		M 1	42	(208)				酸化炎焼成、口縁端がやや内傾、内外面にロクロ目。	
焼		M 2	43	(168)				" 器形はM1類と同様で、外面に横位のカキ目。	
土	甕	M 3	44				(丸 底)	" 内外面に条線状の叩き目とアテ痕、丸底。	
пп		M 4	45					別 外面に格子目の叩き目、内面条線状のアテ痕。	
器		M 5	46			(74)	(平 底)	n 内外面にロクロ目、平底で底部にヘラナデ。	
	堝	N 1	47	(286)				酸化炎焼成、口縁端がやや内傾、内外面にカキ目。	
								_17_	





-19-

#### (3) **SE3井戸跡出土土器**(第11図、図版14)

SE3井戸跡の井戸枠内覆土および井戸枠外の掘り方埋土からは、総計81片の土器が出土している。井戸枠内覆土は5層に大別され、とくに4層と5層から土器が8個体分まとまって発見されている。覆土2・3層は灰褐色のシルト質の土層で、土器や炭化物はほとんど含まない。つぎに各土層毎の出土土器の内容を表に掲げる。

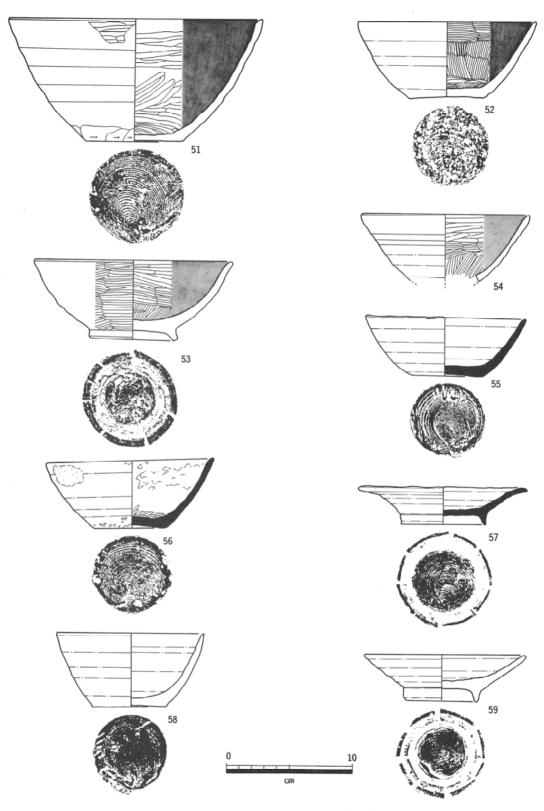
種別	土角	币器	須		恵			묾		赤焼		土 器		J. at	
土層	坏	高台坏	- 「 (ヘラ切り)	坏 (糸切り)	坏 (不 明)	高台坏	台付皿	蓋	甕	坏	台付皿	小甕	甕	小 計	
F1	1				5			1		1		1	3	12	
F 2													2	2	
F 3										1				1	
F 4	4	1	4		1	1	1				1		3	16	
F 5	1		2	3	7							1	3	17	
井戸掘り方			4		14				2	1			11	33	

井戸跡の時期決定の資料となるのは、井戸枠覆土  $4 \cdot 5$  層の土器である。このうち 7 個体(第11図 $51\sim53 \cdot 55\sim57 \cdot 59$ )はほぼ完形で、2 回に分けて意識的に廃棄された状態を示す。また本井戸跡は、前記S X11落ち込み遺構の覆土上面をおおう遺物包含層を掘り込んで構築されていることが確認できたため、S X11落ち込みよりは時期的に新しい。

4・5層の土器群で注目されるのは、内面が黒色化処理されている土師器环(51・52・54)と、口径に比して底径の小さい須恵器环(5・6)の組み合せである。両者とも底部切り離しが糸切り手法によるもので、51の体部下端にはヘラ削りがみられる。53は高台の付いた内黒土師器であるが、外面全体にヘラミガキ調整が認められる。これに須恵器台付皿(57)と赤焼土器台付皿(59)・甕が伴ない、3層の赤焼土器坏(58)もセットになるものと考えられる。問題はヘラ切り無調整の須恵器坏片であるが、遺構の層序からは同時期と判断せざるを得ない。時期はSX11の土器群に直続する10世紀前半頃と推定しておきたい。

表 5 SE3井戸跡出土土器観察表

					NAME OF TAXABLE PARTY.	_
器	種	挿図 番号	計 測 値 (m/m)	形態・整形手法の特徴	底部切り離し	層位
土		51	口径202、底径76、器高97	内面へラミガキ→黒色化処理、外面下端手持ちへラ削り	回転糸切り	F 4
飾	坏	52	口径141、底径60、器高60	内面へラミガキ→黒色化処理、外面ロクロ整形	回転糸切り	F 4
		54	口径132	内面へラミガキ→黒色化処理、外面ロクロ整形		F 5
器	高台环	53	口径158、底径72、器高63	内面へラミガキ→黒色化処理、外面全面へラミガキ調整	回転糸切り	F 4
須	Lor	55	口径127、底径56、器高47	内外面ロクロ水挽き無調整	回転糸切り	F 5
恵	坏	56	口径132、底径58、器高53	内外面ロクロ水挽き、炭化物付着、内面一部ヘラミガキ	回転糸切り	F 5
HE HE	台付皿	57	口径134、底径67、器高30	内外面ロクロ水挽き無調整、内面に墨付着、転用硯?	回転糸切り	F 4
赤焼	坏	58	口径117、底径59、器高59	内外面ロクロ水挽き無調整	回転糸切り	F 3
土器	台付皿	59	口径128、底径56、器高37	内外面ロクロ水挽き無調整	回転糸切り	F 4



第11図 SE3井戸跡出土土器

#### (4) **墨書土器** (第12図 60~79、図版12・14・15・23)

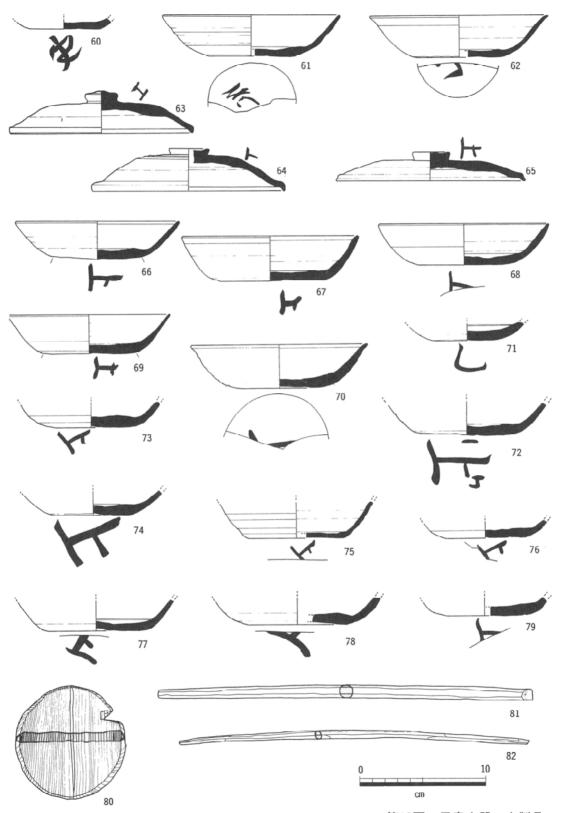
地正面遺跡で出土した墨書土器は22点を数える。これらはすべて須恵器であり、器種は坏・蓋に限られる。S X 11落ち込み出土のものが20点を数え、本遺跡出土墨書土器の大部分をしめる。墨書部位は、坏では底部、蓋では天井部外面である。文字の種類は、「上」が最も多く、他に「史」、「佐」、「工」、「L」などがある。

#### (5) その他の遺物 (第12図80・81・82、図版15、S K25土壙出土種子)

木製品と種子がある。木製品は80の円盤状を呈する底板(径8.9cm、厚さ $6.5\sim8$ mm)、棒状のもので先端を削っているもの(長さ29.75cm、径10cm)、棒状のもので両端より面取りされており箸と考えられるもの(長さ27.2cm、径 $4\sim7$ mm)がある。種子は、SK145土壙より出土したものがあり、ヒョウタン仲間類に属するものである。粒の平均長が約10mmを測り、平安時代のヒョウタン仲間種子の大きさとしては、全国的に中位にあたる。

表 6 墨書土器 (須恵器) 観察表

200			/只心(位)	NO STEEL								
器種	插図 番号	計 口 径	測 値	(m/m) 器 高	色 調	胎土	焼成	底部切り 離し技法	調整技法	出土地点·層位	墨書部位	墨書銘
	60		55		灰色	良	良	回転糸切り		SX11 • F 1	底部	(史) ヵ
坏	61	(140)	(68)	32	11	1)	"	ヘラ切り		n • n	))	〔佐〕ヵ
	62	(141)	(65)	33	明灰色	11	1)	"		n • n	1)	
	63	(144)		33	灰色	粗砂混	"	n		// • //	外 面	エ
蓋	64	(152)		34	n	良	n	"		n • n	"	(上)カ
	65	(150)		23	n	11	"	n		n • n	))	上
	66	130	70	30	n	11	11	11		11 • 11	底 部	上
	67	(140)	(80)	35	11	粗砂混	n	"		11 • 11	11	上
	68	(134)	(76)	32	11	良	n	"		11 • 11	))	(上)カ
	69	(127)	(73)	31.5	明灰色	//	11	11		// • //	11	上
	70	(139)	(62)	35	11	小礫混	"	"		SE 3	//	(上)ヵ
	71		48		n	良	"	回転糸切り		184—64 • III	77	L
	72		65		n	粗砂混	n	ヘラ切り		SX11 • F 1	))	上
坏	73		60		11	11	n	11		" • "	11	上
	74		59		灰褐色	小礫混	77	11		" • "	))	上
	75		(74)		青灰色	粗砂混	11	11		<i>11</i> • <i>11</i>	))	上
	76		(60)		灰色	11	"	"		// • //	11	上
	77		(84)		紫灰色	11	"	"		" • "	11	上
	78		(78)		明灰色	良	11	n		11 • 11	11	(上)ヵ
	79		(64)		灰色	粗砂混	"	11		11 • 11	n	(上)ヵ
	4	123	73	33	11	11	1)	"		)) • ))	11	(ち)ヵ
蓋	23	(160)			"	))	11	"		11 • 11	外 面	(上)ヵ



第12図 墨書土器:木製品

## Ⅲ 前田遺跡

#### 1 **遺 構**(第13·14図、図版 6)

前田遺跡の調査は、はじめほ場整備事業の水路および道路敷予定部分に対し、50m毎に2m四方の坪掘りを行ない、遺跡のおおよその範囲確認を試みた。つぎに遺構・遺物の検出地域ないし土層の疑問地域4ケ所に対し、幅2~4m、長さ14~94mのトレンチを設定した。トレンチ部分の表土剝ぎに際しては重機を使用している。

今回の調査で遺構や遺物がまとまって検出されたのは、前田遺跡 南東部176~198-65・66グリッド付近である。この地域は、地表面 から30cm程で第IV層青灰色粘質砂に達し、第IV層の直上面で明瞭な 遺構の輪郭が認められた。

本地域で検出された遺構には、土壙 5 基・溝状遺構 7 条・ピット 群などがある(第13図)。土壙群は精査地区の中央やや東寄りに、ピット群は精査地区の西半に分布する傾向を示す。

ピット群の中には、掘り方と柱のアタリが識別できるものや、ピットの底面に柱礎板と思われる板材を敷いているものもあり、掘立柱建物跡ないし倉庫跡の存在が推定されるが、発掘面積が限られているため明らかでない。ピットの埋土は、炭化物を含む暗褐色ないし黒褐色の砂質土である。

溝状遺構は、幅20~30cm、長さ450cm、深さ8cm前後を測り、方向は真北に対し10~30度程西に傾いている。遺構の重複関係から、SD22溝よりSD17溝が新しく、SD19・20溝よりSD18溝が新しい。埋土は炭化物を含む暗青灰色ないし暗褐色の砂質土で、SD17・22溝中から赤焼土器の破片が少量出土している。

180-SD22 SD17 o SK23 SK21 SK24 0 SK16 SD20 195 SD19

第13図 前田遺跡南東地区遺構配置図

土壙のうちSK16土壙は、精査地区191・192—66グリッドで検出されたもので、平面形が長径175cm、短径55cmの隅丸長方形を呈する。南東隅が直径30cm前後、深さ28cmのピットによって切られている。上面が耕作によって削平されているためか深さが約8cmと浅く、底面は平坦である。埋土は、炭化物を多く含む黒褐色粘質微砂の単一層である。

土壙の中央やや南東寄りから、ほぼ底面に張り付いた形で須恵器坏2個(第15図1・2図版16)と赤焼土器坏1個(第15図6、図版16)が出土している。これらの土器の器形や調整技法からみて、本土壙の時期は10世紀前半頃と推定される。

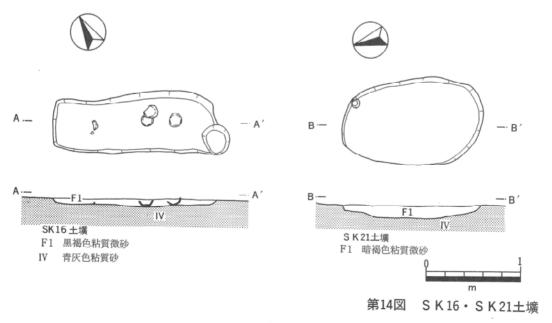
S K26土壙は、S K16土壙の北東脇で検出されたもので、平面形は長径90cmの不整楕円を呈する。深さは最深部で22cmを測り、断面形は擂鉢状である。埋土は、S K16土壙と同じく炭化物を含む黒褐色粘質微砂の単一層である。遺物は、埋土の中から赤焼土器坏が 3 片出土している。本土壙の時期も10世紀前半頃と推定される。

S K21土壙は、189-65・66グリッドで検出されたもので、平面形は長径147cm、短径90 cmの長楕円を呈する。深さは最深部で12cmを測り、底面がやや丸味を有する。埋土は、炭化物を少量含む暗褐色粘質微砂の単一層で、遺物は認められない。

S K23土壙は、189-65グリッドで検出されたもので、平面は直径約60cmの円形を呈する。 深さは最深部で14cm、埋土は暗褐色粘質微砂の単一層で、遺物は認められない。

S K24土壙は、S K23土壙の40㎝東側で検出されたもので、平面は直径約55㎝の隅丸方形を呈する。深さは7㎝、埋土は暗褐色粘質微砂の単一層で、遺物は認められない。

SK21·23·24土壙は、遺物は認められないが層位からみて平安時代のものと考えられる。

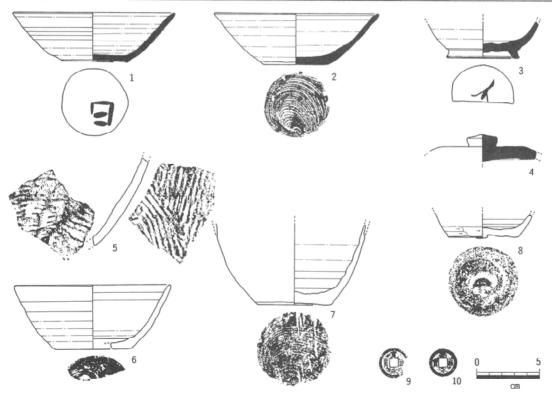


#### 2 遺物(第15図・図版16)

前田遺跡から出土した遺物は、整理箱にして約3箱分である。遺物の中では土器が大半を占め、その他に古銭が2枚(第15図9・10)出土している。

表 7 前田遺跡出土土器観察表

뀲	種	挿図 番号	計 測 値 (m/m)	形態・成形手法の特徴	出土地点·層位
須	北不	1	口径127、器高40、底径51	底部切り離し回転糸切り無調整、底部外面に「日」の墨書銘。	SK16-F1
294	-7	2	口径127、器高41、底径50	底部切り離し回転糸切り無調整。	SK16-F1
恵	高台付坏	3	底径56	底部切り離しヘラ切り、底部外面に「イ・□」の墨書銘。	SD17-F1
700	蓋	4	厚さ 9	天井部切り離しヘラ切り、宝珠形の鈕部をもつ。	192—65—III
赤	遞	5	厚さ6~8	酸化炎焼成の丸底の甕底部片、内外に条線状の叩き目をもつ。	SK26-F1
焼	‡不	6	口径122、器高51、底径59	底部切り離し回転糸切り無調整、内外面にロクロ目あり。	SK16-F1
土	小彩	7	底径58	底部切り離し回転糸切り、内面にロクロ目、外面は損耗著しい。	SK16-F1
器	形甕	8	底径56	底部切り離しヘラ切り、体部下端にヘラ削り調整。	SD17-F1
金属	古	9		「寛永通宝」	200-65-III
製品	銭	10		「寛永通宝」	x - o



第15図 出土遺物

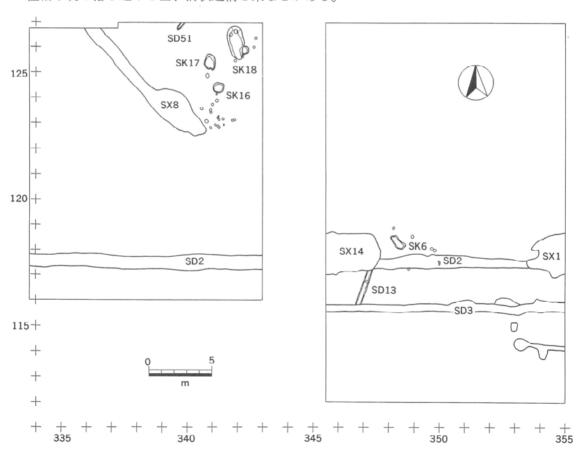
### Ⅳ 塚田遺跡

#### 1 遺構(第16図、図版7)

塚田遺跡の調査は、昭和52年度の水路部分の成果をもとに、庄内広域営農団地農道の約100m西側、現排水路の南側約3000㎡を対象に実施した。はじめ対象地区を1m四方に45ケ所任意に坪掘りし、遺物の出土状況などから、対象地区の北側に東西19m、南北34mの発掘区を2ケ所設定した。便宣上発掘区を東区・西区と分けて呼ぶことにする。

面整理から遺構検出の段階で、両発掘区の南側が低湿地になっていることがわかり、この地域は精査区域から除外した。精査区域の内でも東区は、遺構が東西方向に延びる近代 の溝跡が3条検出されただけで、遺物の出土量もきわめて少ない。

西区は、北東隅から遺構と遺物が多く検出された。遺構には、土壙 3 基、ピット32個、性格不明の落ち込み 1 基、溝状遺構 1 条などがある。



第16図 遺構配置図

ピット群(第16図、図版 8) 精査西区北東隅 $340\sim342-123\sim125$ グリッドで検出されたものである。各ピットは直径 $15\sim30$ cm、深さ 5 cm前後の円形を呈し、埋土は黒褐色粘質微砂である。掘り方と柱アタリを識別できるものもあり、建物跡柱穴の一部と思われる。

SK16土壙(第17図、図版8) 精査西区北東隅341—125グリッドで検出されたもので、 平面は直径85cmの略円形を呈する。深さは最深部で17cmを測り、底面が東から西に向けて 傾斜する。埋土は2層に分けられ、上層に赤焼土器片や炭化物を少量含んでいる。

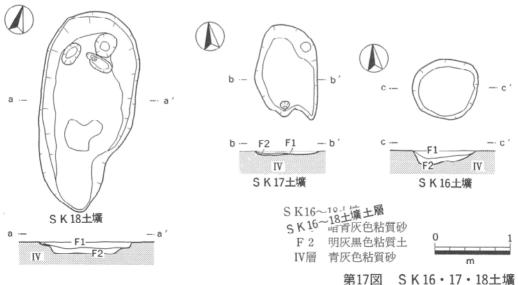
時期は、平安時代前半9世期末葉から10世紀前半頃と推定される。

SK17土壙(第17図、図版8) 精査西区北東隅340・341—126グリッドで検出されたもので、平面は長径130cm、短径82cmの不整楕円形を呈する。深さは4cm前後と浅く、底面は平坦である。埋土は2層に分けられ、上層に須恵器坏(第18図5)や土師器甕片などを少量含んでいる。

時期は、平安時代前半9世紀末葉から10世紀前半頃と推定される。

SK18土壙(第17図、図版8) 精査西区北東隅341・342—126・127グリッドで検出されたもので、平面は長径265cm、短径125cmの不整楕円形を呈する。深さは最深部で35cmを測り、中央にいくに従って深くなる。埋土は2層に分けられ、上層に遺物や炭化物を多く含んでいる。出土した土器には、土師器甕(第18図1~3)、須恵器坏(同図6)、須恵器蓋(同図8)などがある。とくに刷毛目調整や木葉痕の施こされる土師器甕類は、庄内地方でも例の少ないものである。

時期は、平安時代前半9世紀末葉から10世紀前半頃と推定される。



#### 2 遺物(第18図、図版17、表8)

塚田遺跡から出土した遺物は、整理箱にして約2箱分である。すべて土器類で、木製品などその他の遺物は認められなかった。

土器は、平安時代のものとそれ以降のものに分けられる。平安時代の土器は、土師器・ 須恵器・赤焼土器の3つに大別できる。量的には赤焼土器が最も多く60%を占める。

土師器は、坏・小形壺・甕などの器種がある。内面ないし内外面に黒色化処理が施されているもの(第18図 4)とそうでないもの(同図  $1 \sim 3$ )とがあり、後者の器種はほとんどが甕類である。須恵器は、坏・蓋・壺・甕などの器種がある。蓋 1 点(同図 9)を除いて、小片が多く全体の器形を知り得るものは少ない。赤焼土器は、坏・甕・堝などの器種がある。赤焼土器も小片が多く、全体の器形を知り得るものは少ない。

S K18土壌の覆土1層からは、土師器甕(第18図1・2)と底部切り離しが回転糸切り手法による須恵器坏(同図6)、同蓋(8)および赤焼土器甕(11)が共伴して出土した。 庄内地方の場合は、山形県内陸部と比較して、刷毛目調整をもつ土師器甕類が少なく、あったとしても余目町上台遺跡のように平安時代後半に属するものがほとんどである。S K18土壌の例は、甕の底部に木葉痕が見られることや、近くからロクロを用いない内外黒

表 8 塚田遺跡出土土器観察表

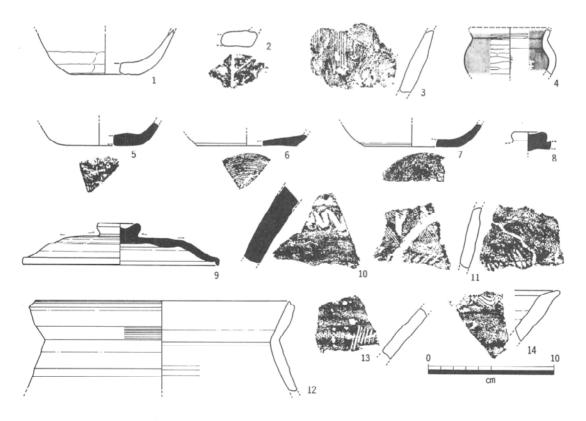
器	種	挿図 番号	計 測 値 (m/m)	形態・成形手法の特徴	出土地点 • 層位
土師器	甕	1	底径56	体部外面下端に横方向の手持ちヘラ削り調整。	SK18-F1
		2	底部厚11.5	甕の底部片で、木葉痕が認められる。スス付着。	SK18-F1
		3	器厚11	内面に刷毛目、外面にヘラ削り調整。	344-411-II
	小形甕	4	最大径74	内外面をヘラ磨きの後、黒色化処理。	366—122—II
	坏	5	底径53	底部切り離しヘラ切り。	SK17-F1
須		6	底径80	底部切り離し回転糸切り。	SK18-F1
惠器		7	底径74	底部切り離しヘラ切り。	339—126—III
	蓋	8		蓋鈕部。	SK18-F1
		9	口径154、器高33.5	天井部に回転ヘラ削り調整	339—126—III
	甕	10	器厚15.5	甕の口縁部片、外面に横位のヘラ描き波状文あり。	341—128—III
赤土	魏	11	器厚 9	内外面に叩き目、内面にカキ目調整。	SK18-F1
焼器		12	口径201	口縁部がくの字状に外反し、内外面に横方向のカキ目調整が施される。	X—II
珠陶 洲 系器	擂鉢	13	器厚9.5	内面に7~9条単位の卸し目あり。	332—125—III
		14	器高11.5	口唇部内面に櫛目波状文あり。	332—125—III

色化処理のある小形壺(同図 4)が出土していることなどからみて、10世紀代に遡る資料と推定され、煮沸形態としての赤焼土器甕や堝との関連を考える上で興味深い。最近城輪柵からも、細い刷毛目の施された平安時代の土師器甕が出土しており、今後さらに検討を要する。

陶磁器は、中世のものと近世以降のものとに分けられる。中世陶器は 3 片出土しており、すべて珠洲系の擂鉢(第18図13・14)である。13は内面に  $7\sim 9$  条単位の御し目、14は口唇部内面に櫛目の波状文があり、時期的には15世紀代・室町時代頃に比定できる。

つぎに塚E	田遺跡の	発掘区毎の	土器の種別	点数を掲げる。
-------	------	-------	-------	---------

		1 別	須 恵 器	土	師		器		赤焼土器	陶石	法 器	.1. =1
発掘			754 7EA 100*	内 黒	内 外	黒	その	他	小光工器	中 世	近世~	小 計
坪	掘り	区	28	3	0		11		75	1	1	119
精	査	区	44	4	3		18		161	2	9	241
遺	構	内	3	0	0		42		1	0	0	46
小		計	75	7	3		71		237	3	10	406



第18図 塚田遺跡 出土土器

### V 佐渡遺跡

#### 1 遺構(第19図、図版9・10)

佐渡遺跡の調査は、昭和52年度の水路部分の成果をもとに、庄内広域営農団地農道のすぐ東側、現排水路の北側約3000㎡を対象に実施した。はじめ対象地区を1m四方に40ケ所任意に坪掘りし、遺物の出土状況などから、対象地区の両側に東西40m、南北30mの精査区を設定した。発掘区のグリッド名は、410~430-250~264となる。

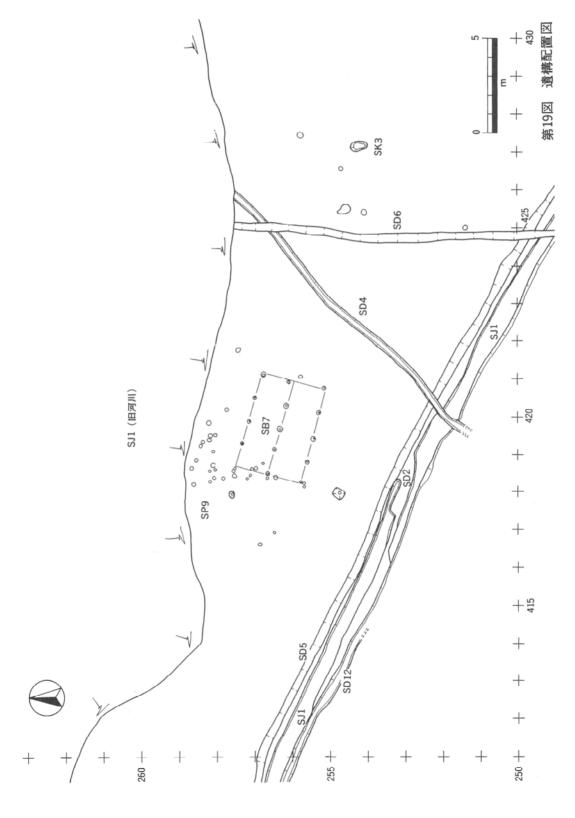
今回の調査で検出された遺構には、掘立柱建物跡 1 棟、旧水田畦畔 1 条、溝状遺構 2 条、ピット群、旧河川と思われる大溝などがある。

SB7建物跡 精査区中央418~421-256~258グリッドで検出された桁行 4 間、梁行 2 間の東西棟である。梁向は真北から $17^{\circ}15'$ 東に振れている。柱間の計測値は、桁行長516cm(約17尺)、梁行長350cm(約11.5尺)、桁間は129cm等間、梁間は175cm等間となる。掘り方は、ほとんどが20cm内外の円形を呈し、柱のアタリも円形である。総柱の建物で、倉庫跡の可能性もある。

柱穴の埋土は、炭化粒子を含む黒褐色粘質微砂で、青灰色微砂も少量混っている。柱穴 内からは遺物の出土はなかったが、建物跡周辺の出土土器からみて、時期は平安時代10世 紀前半頃と推定される。

SJI **畦跡** 精査区の南部を西北西から東南東に走る旧水田の畦跡である。畦の向きは、およそ $N-61^\circ$  一Wを測る。畦の幅は、基底部で120cm(約 4 尺)、現存上端部で90cm(約 3 尺)、現存高で $10\sim12cm$ である。SJI 畦跡の北側に幅約40cm、深さ5cmの溝跡(SD5)が走り、南側にも一部同様な溝跡(SD12)がみられる。畦と対になる水路と思われる。本畦跡の南側は、全体的に1 段低くなり、第IV 層青灰色粘質砂の上面に厚さ10cm 程の黒褐色粘質土が堆積している。旧水田面と思われる。

畦跡およびSD5・12溝跡からは遺物はなかったが、水田面直上の黒褐色粘質土中から 須恵器の蓋(第20図7)・甕(同図8・9)・小形壺(同図10)片などが出土している。ま たSJ1畦跡を切って作られているSD4溝跡埋土からも、須恵器や赤焼土器が数片出土 している。これらのことからSJ1畦跡と水田の時期は平安時代10世紀頃と推定される。 SX3落ち込み 精査区東端427−255グリッドで検出された長径90cm、短径47cmの小判形 を呈する落ち込みである。深さは最深部で15cmを測り、断面は鍋底状を示す。埋土は黒褐 色粘質土の単一層で、中に骨片を含む焼成炭化物がびっしり詰まっている。床面は焼けた 痕跡がない。時期を決定するような遺物は認められなかった。



#### 2 遺物(第20図、図版18、表9)

佐渡遺跡から出土した遺物は、整理箱にして約6箱分である。遺物の中では土器が大半を占め、その他に木製品や土錘、フイゴの羽口・古銭などが出土している。

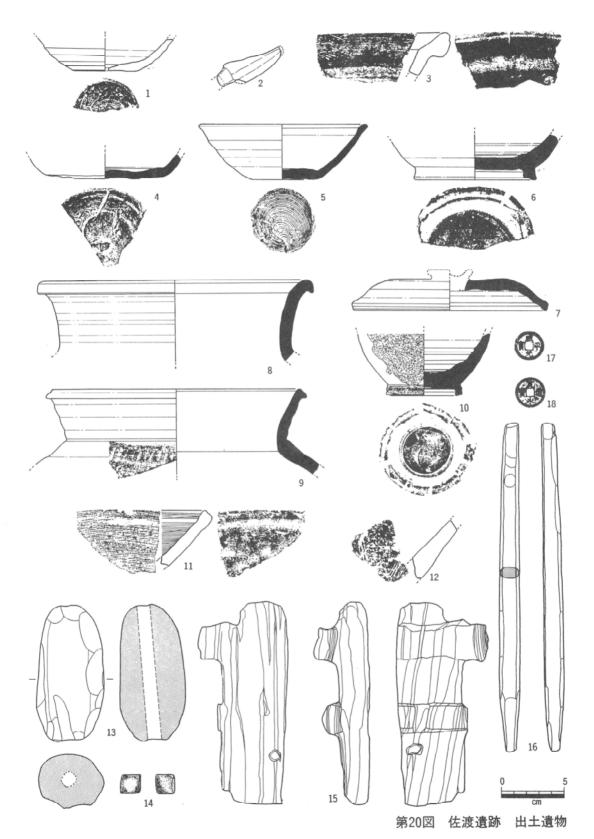
(1) 土 器 平安時代のものとそれ以降のものに大別される。平安時代の土器は、土師器・須恵器・赤焼土器の3つに分類され、各々が供膳・貯蔵・煮沸の機能を分担していたものと考えられる。土師器は、すべて内面ないし内外面が黒色化処理されている坏類で、量的には少ない。須恵器は、坏・蓋・壺・甕などの器種があり、坏の底部切り離し手法にはヘラ切りと回転糸切り手法との2種がある。赤焼土器は、坏・堝などの器種があり、量的にはもっとも多い。これらの時期は全体的に平安時代中葉10世紀前半頃に位置付けられる。つぎに発掘区毎の土器の点数を掲げる。

種別	須 恵 器	土 自	師 器 赤焼土器		陶 磁 器		小計
発掘区	須 心 砧	内 黒	内 外 黒	小光工品	中 世	近世~	小計
坪掘り区	56	17	2	369	1	14	459
精査区	138	28	12	1,071	1	12	1,262
遺構内	5	3	0	40	0	0	48

(2) 古 銭 「蔵平元宝」と「寛永通宝」が1点づつ出土している。「咸平元宝」の初鋳 年代は北宋咸平2 (999) 年、「寛永通宝」の鋳造期は明和4 (1767) 年と考えられる。

表 9 佐渡遺跡出土遺物観察表

器	種	挿図 番号	計 測 値 (m/m)	形態・成形手法の特徴・他	出土地点 • 層位
赤焼土器	坏	1	底径48	底部切り離し回転糸切り、内外面にロクロ目あり。	
	把手	2	厚き 9~17	手づくねの堝ないし甑の把手。	Х-О
	堝	3	器高9.5~14.5	口縁部が肥厚して外反する堝の一部。内外面にカキ目、内面に煤付着。	426—258—III
須恵器	坏	4	底径94	底部切り離しヘラ切り。	411—261—II
		5	口径130、器高44、底径50	底部切り離し回転糸切り。口径に比し底径が小さい。	423—258—III
	蓋	7	口径152	天井部切り離しヘラ切り。鈕部欠損。	423—250—III
	壺	6	底径96	高台取付けのナデ調整によって底部切り離し手法不明。	421—255—II
		10	底径51.5	底部切り離し回転糸切り。体部外面と底部内面に自然釉付着。	428—251—III
	33/10	8	口径207	口頸部がほぼ直立し、外面端が著しく屈折する大甕。	421—251—II
		9	口径195	口縁部がく字状に外反し、内外面に細いロクロ目が付く大甕	421—251—II
珠陶 洲 系器	鉢	11	器高9.5	口唇部中央がやや凹み、内面に細い横方向の御し目あり。	427—253— II
	擂鉢	12	器高10~16	擂鉢の体部下半片。珠洲系の陶器で、内面に細い縦方向の御し目あり。	Х-О
土製品	上錘	13	長径10.7、短径52、厚さ40	長軸に対し平行な貫通孔が1本入る。色調明褐色〜黒褐色。	413—257—III
石製品	?	14	幅14~15.5	軽石製の正六面体、サイコロ状石製品。全面に研磨痕あり	423—255—II
木製品	下駄	15	長さ15.9、厚さ3.8	長方形の連歯下駄で、左半分が欠損している。右横緒穴残存。	SD 2 —F 1
	?	16	長さ260、幅15、厚さ15	平たい棒状の木製品で、正面上端に黒漆塗色がある。	413—256—II
金属製品	古	17		北栄銭「咸平元宝」	420—257—III
	銭	18		本邦銭「寛永通宝」	416—256—II



## VI まとめ

遊佐町下小松に所在する地正面ほか 3 遺跡は、旧地形の微高地を集落跡として選びながらほぼ連続して分布している。 4 遺跡の主たる遺構の年代は、すべて平安時代前半  $9 \sim 10$  世紀代におさまり、時期的にも一連のものとして把えることができる。

遺物のうち土器については、一つの注目すべき成果を得ることができた。それは地正面遺跡SX11落ち込み遺構に代表されるような、平安時代前半9世紀後半代の土器組成とその意味する性格である。SX11落ち込みの土器群は、土師器・須恵器・赤焼土器の三種からなり、量的には須恵器と赤焼土器が半々を占め、土師器の占める比率は極めて少ない。小ぶりのへう切り離し手法による須恵器坏と赤焼土器各器種のセットは、平安時代前半の北陸地方から庄内・秋田県西部の北日本海沿岸に特徴的にみられるもので、いわば越の国の文化波及圏ともよべる。これに対し山形県内陸部や宮城・福島両県は、いわば陸奥国文化圏として概括できるような当該期の土器組成を示す。ただし今回の地正面・塚田遺跡の調査では、従来庄内地方で類別の少なかった9・10世紀代の刷毛目調整のある土師器甕を少量ながら検出することができ、両文化圏の接触地域としての特徴をうかがわせる。

遺構については、とくに地正面遺跡で2組の掘立柱建物跡1棟と倉庫跡1棟および井戸跡という組合せを確認できた。時期は10世紀半頃と推定される。主屋と付属する1~2棟の建物、および倉庫、井戸、数基の土壙という集落の構成単位は、近年庄内地方でも藤島町平形遺跡や酒田市北田遺跡などで典型的に発見されており、律令村落の普遍的なあり方となっている。また建物跡の軸線も真北から西にやや傾く点で共通性を示す。これらの背景として、集落が条里水田の中にあって、その地割の影響を受けただろうことも十分に考え得る。事実佐渡遺跡では平安時代前半の水田畦畔も検出されている。

また地正面遺跡精査区南端では、9世紀後半頃の竪穴住居跡も2棟確認されている。掘立柱建物を基本とする遺構群と竪穴住居を基本とする遺構群の関連をどう把握するかは、 今後の重要な課題であるが、ここで一つの仮説を提起しておく。

古墳時代からの延長上にあると考えられる竪穴住居は、在地における自然村落の系譜に連なるものであり、平安時代の初めにあってまだ残存し、その後に政治的な計画村落である掘立柱建物群に移行したとするものである。飽海地方では八幡町俵田遺跡からも9世紀代の竪穴住居が1棟検出されており、奈良時代の竪穴住居が発見される可能性もある。ただし鶴岡市岡山遺跡や立川町真木遺跡などの丘陵や山間部では、平安時代後半11世紀代まで自然村落としての竪穴住居が残っていく。

# 図 版

地正面遺跡 図版  $1 \sim 5 \cdot 11 \sim 15$ 

前田遺跡 図版6・16

塚田遺跡 図版7·8·17

佐 渡 遺 跡 図版 9 · 10 · 18

図版 1

地正面遺跡



下小松地区遠景 (東から)



地正面遺跡近景 (西から)



地正面遺跡1次調査 精査区近景

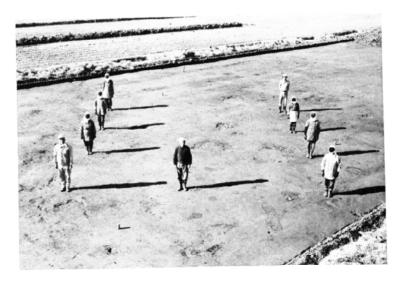
#### 図版 2 地正面遺跡



地正面遺跡 2 次調査 北地区全景



同 上 南地区全景

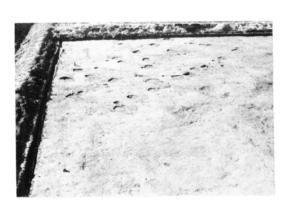


2次調査発掘風景 (SB132建物跡)

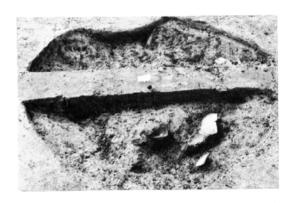
図版 3 地正面遺跡



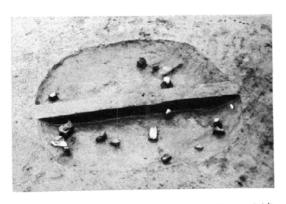
S B 101 · 112 · 132建物跡近景



S B 101 · 112建物跡全景



S K143土壙



S K145土壙

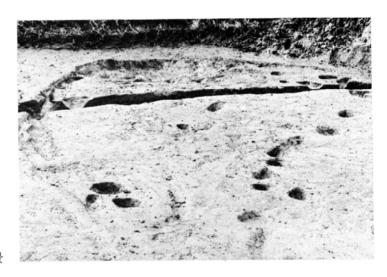


S E 149井戸跡

図版 4 地正面遺跡



S T 146 · 147住居跡全景

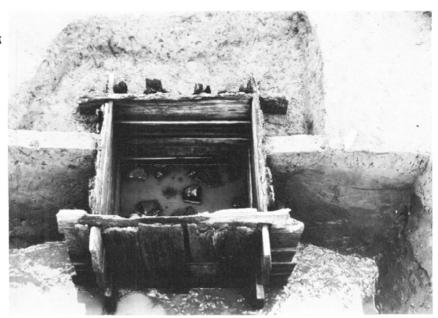


S T 146 · 147住居跡近景

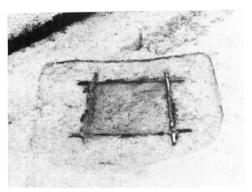


S X 11落ち込み近景

図版 5 地正面遺跡



SE3井戸跡近景。



SE3平面プラン検出状況



SE3土器出土状況



SE3南東隅井戸組



SE3南西隅井戸組

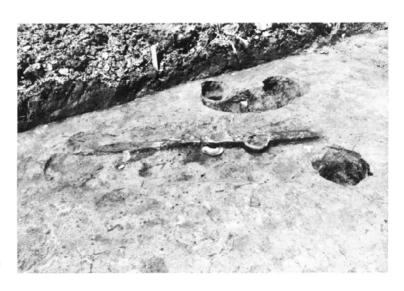
図版 6 前田遺跡



前田遺跡遠景(東から)



前田遺跡南東精査区近景



S K16土壙

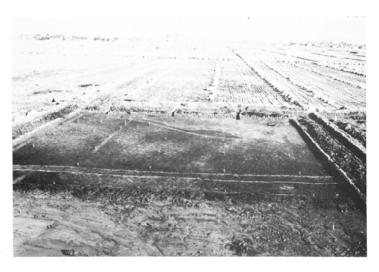
図版7 塚田遺跡



塚田遺跡遠景(南から)



精査区東半近景(南から)



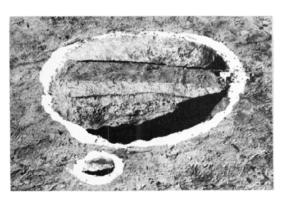
精査区西半近景 (東から)

図版 8

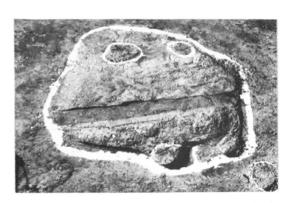
塚田遺跡



精査区西半遺構検出状況



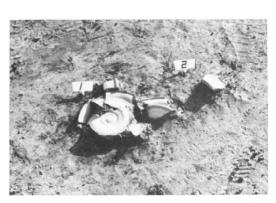
S K16土壙



S K17土壙



S K18土壙



遺物出土状況

#### 図版 9

#### 佐渡遺跡



佐渡遺跡精査区近景



遺跡近景(南から)



SJ1畦畔、SD2·5溝跡

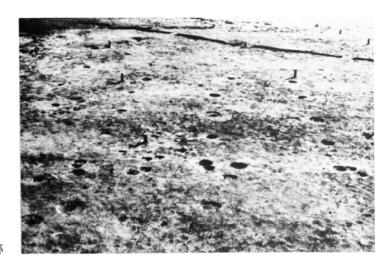


S G11大溝

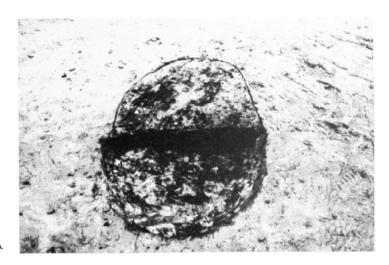


SG11大溝断面

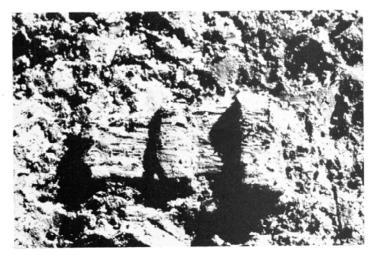
#### 図版10 佐渡遺跡



SB7建物跡

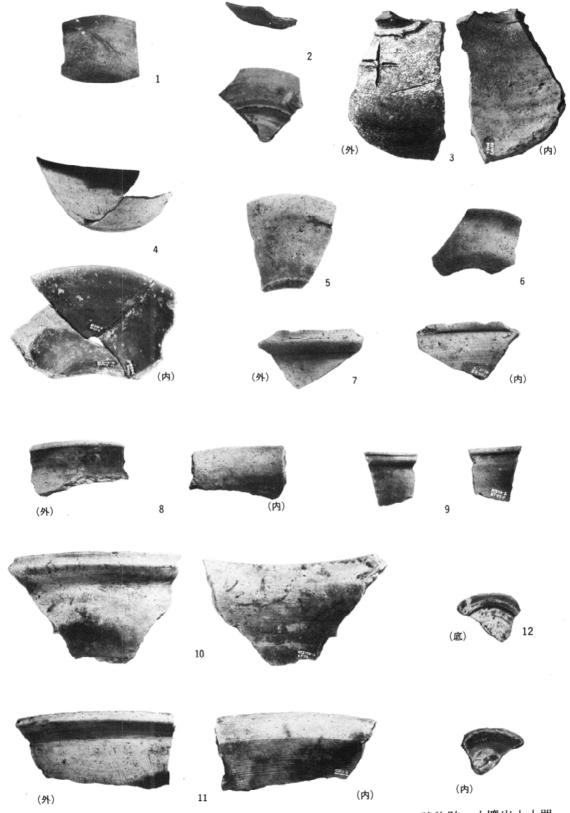


SX3落ち込み



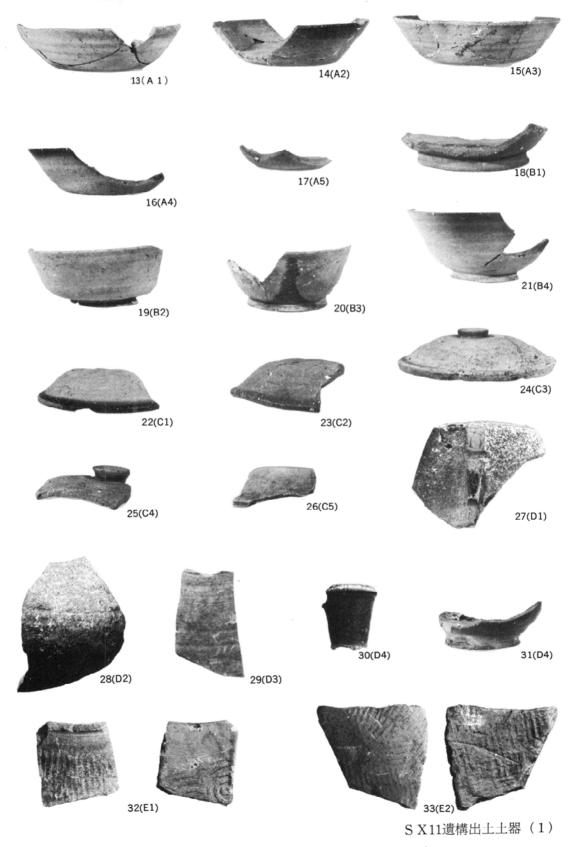
下駄出土状況

図版11 地正面遺跡

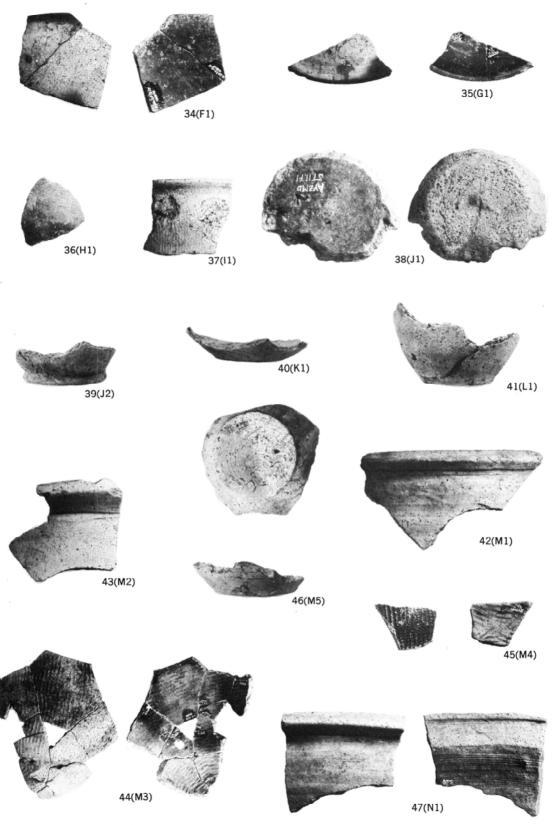


建物跡・土壙出土土器

#### 図版12 地正面遺跡

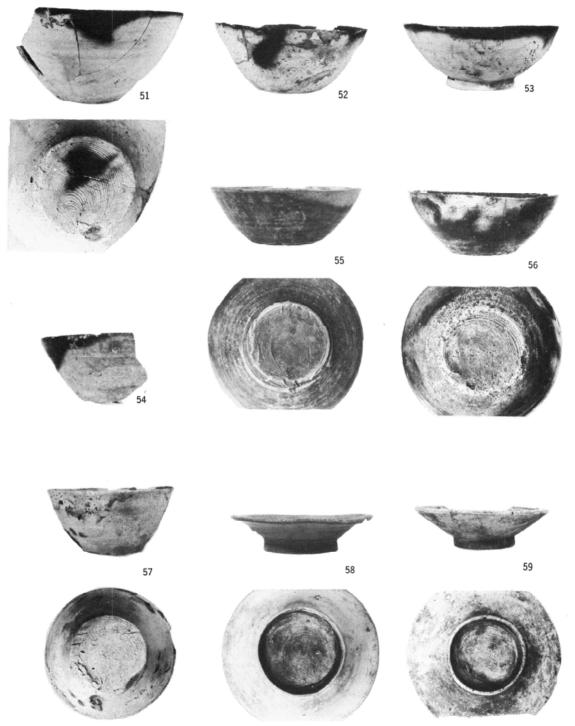


#### 図版13 地正面遺跡



S X11遺構出土土器 (2)

図版14 地正面遺跡



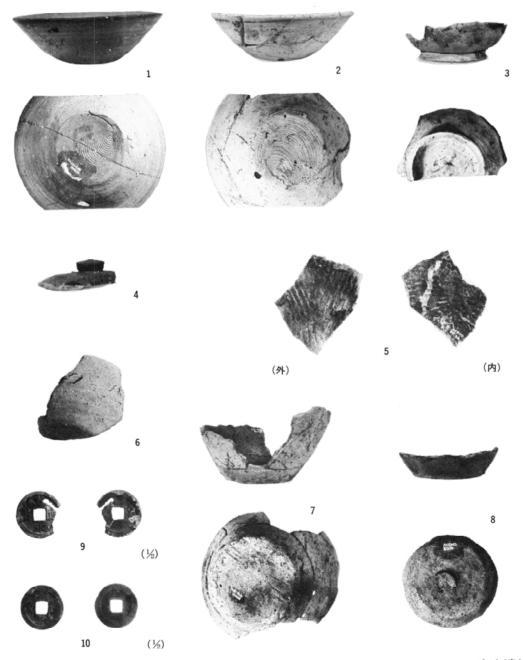
SE3井戸跡出土土器

図版15 地正面遺跡 

墨書土器·木製品·種子

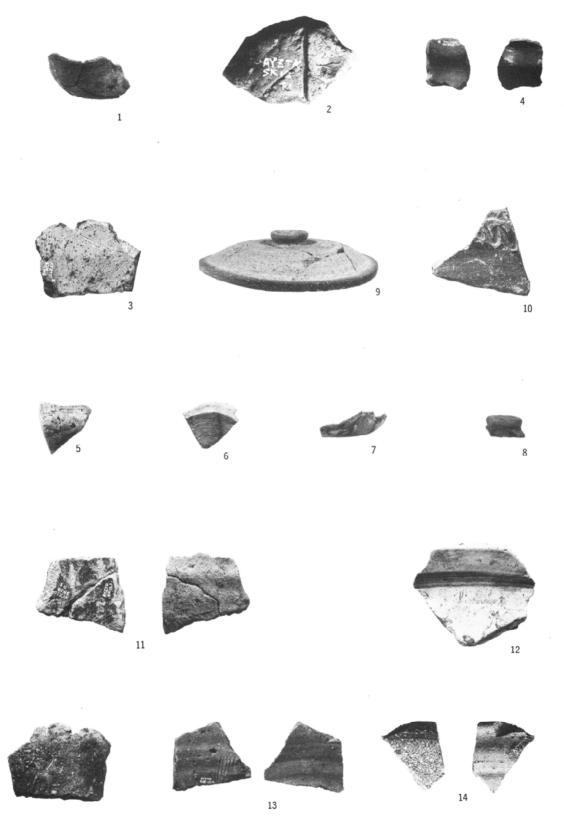
SK145土壙出土種子

図版16 前田遺跡



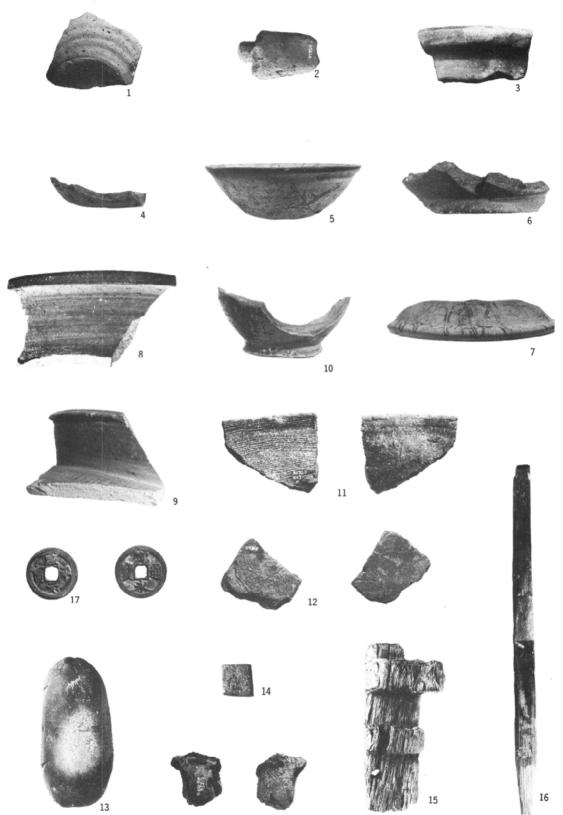
出土遺物

#### 図版17 塚田遺跡



出土遺物

#### 図版18 佐渡遺跡



出土遺物

### 山形県埋蔵文化財調査報告書第51集

ぢ しよう めん 正 面遺 跡 まえ だ 前 遺 田 跡 だ 田 つか 塚 遺 跡 ど渡 遺 跡

## 発掘調査報告書

昭和57年3月25白印刷 昭和57年3月31日発行

発行 山形県教育委員会 印刷 ㈱ 大 風 印 刷